

# かわりつつある社会を表現 するためのエコミューゼ学

ポルトガルのレイリア市にあるモンテ・レドンド邸博物館

マリオ・モブリニート

## THEORY AND PRACTICE OF SOCIAL MUSEOLOGY The Estate's Museum of Monte Redondo, Leiria-Portugal

Mario MOVRINITO

世界中の博物館が変化中、その結果にも様々な段階が見られる。展示品の収集、保存と陳列という従来の機能以外に、現代社会の諸問題に関するコミュニケーションの場としての役割がますます必要とされている。この目的の為に入手可能なあらゆる技術を活用し、最新のマーケティングとビジネス管理の指標に従うことで近代化を実現した。この他にも社会的・文化的誘因として中心的な役割を担っており、博物館を維持する環境の発展に参加し、その媒体となる方法を模索しているのである。

現代のポルトガルにおける博物館学の概観（モンテ・レドンド邸博物館も含めて）に対する関心はまだ薄いだが、その多様な特徴を認識しなくてはならない。すなわち、概念、姿勢、目的が博物館学の全般的な傾向だけではなく、その参加者が市民権を擁護しながら社会においてどの様な役割を担い、どの様な立場をとればいいのかを提示すべきである。

ポルトガルでは、全国的に様々な形態の博物館学は展開している。特に1974年4月25日の革命によって民主主義がもたらされ、植民地支配（アンゴラ、モザンビーク、ギニア、チモール）に終止符が打たれた後、国立博物館同様、激しい地方分権化の中で生まれ、自治体が支援する文化、エコロジー、連合化に関連した運動の力強い主導権によって何百もの博物館学的プロセスが生まれた。

地元の特長技能や専門技術の発見と評価

に至ったという意味で、博物館学が様々な点、とりわけ教義的な点で歴史、建築術、言語学、考古学、人類学等の分野における数多くの世襲財産を表現する為の特典的な手段である事を何千人もの人々が発見したのである。

永続的あるいは断続的に、創造的あるいはモデルの再生という形で、保守的あるいは積極的にそれらを支えるコミュニティの発展に参加する事で、私たちは正に博物館学的プロセスに携わっているのである。私たちが対象としている博物館学は、いわば資金的手段もなく、高度な知識もなく、時には、時代後れのイデオロギーや矛盾とみなされる様な不十分な学問である。しかしそれは時世の文化、多様な文化、そして変容する社会の様相を表わす博物館学であるともいえる。

博物館と博物館学的プロセスは、現代のポルトガルの博物館学の現状を表わすものと思われる。日々の博物館学は、変化の本質的な構成要素であるのは明らかである。それは限界や断絶の現象ではなく、むしろより民主的で自由な社会、より公共的な意識、そして地方分権とそれに伴う地元の資源や人材を尊重する新しい規範的な発展の所産を反映している。

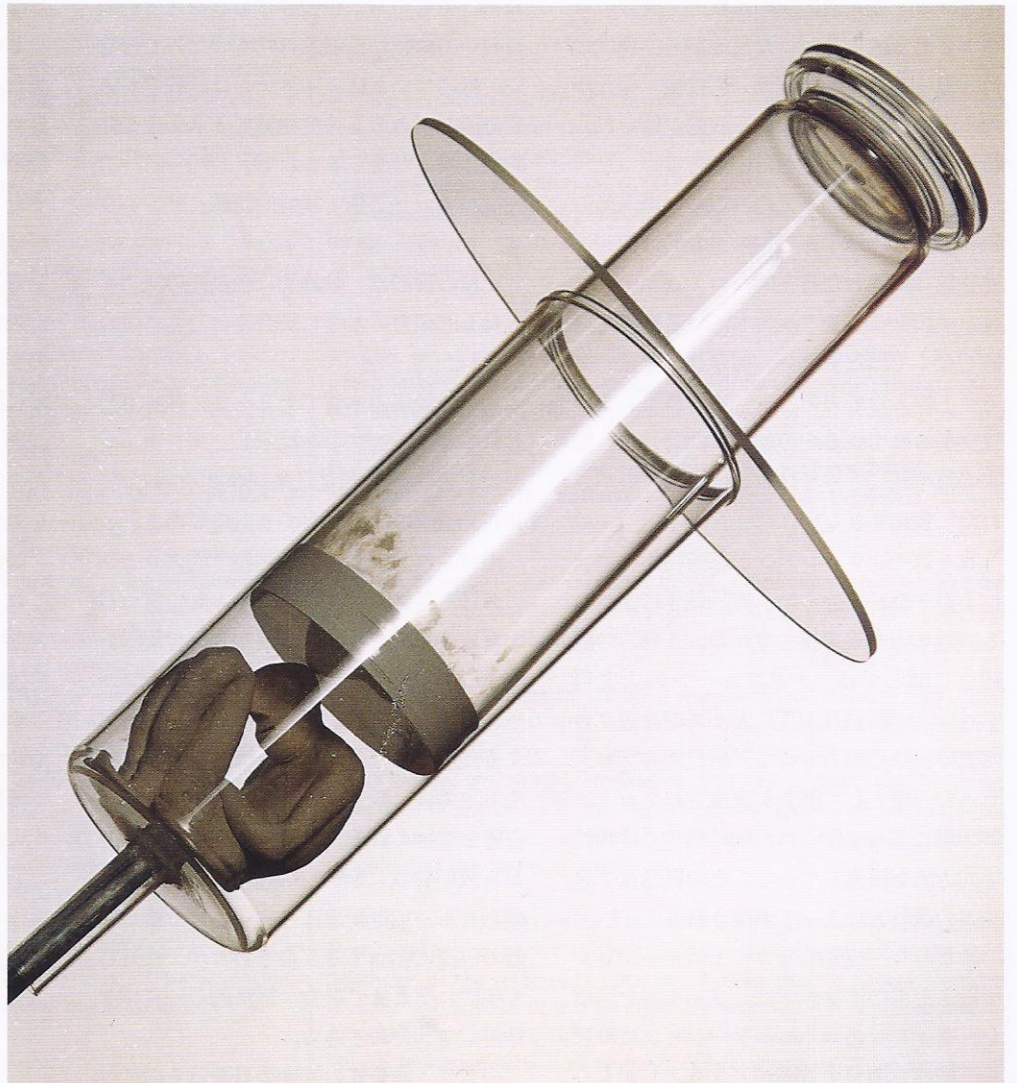
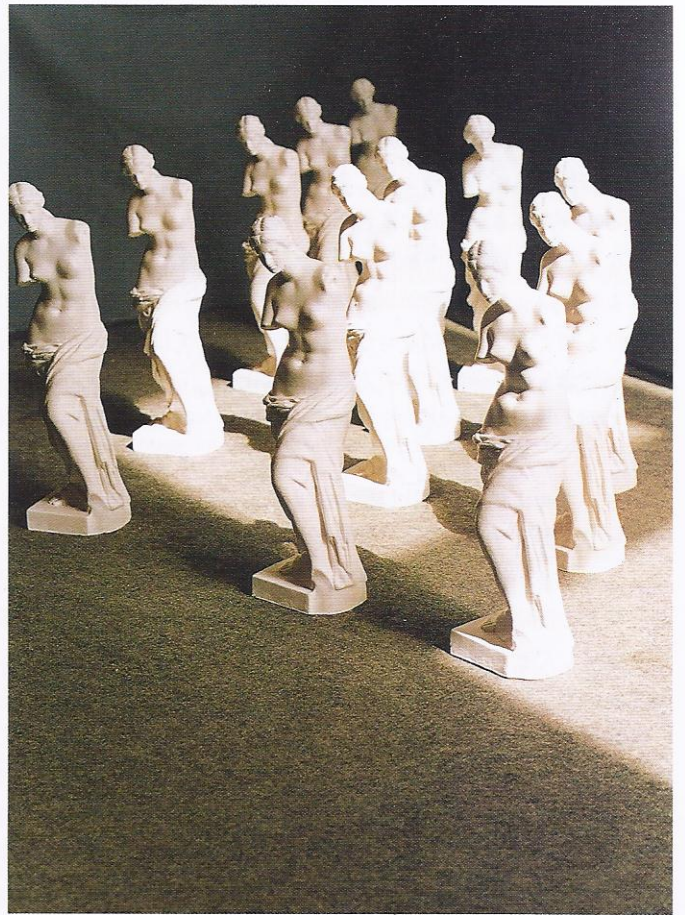
世襲財産という概念が広がった事で、博物館学の対象の再定義が余儀なくされる。コミュニティが博物館学の管理と実践に参加し発展の手段とする事、学際的な問題、新技術の利用、コミュニケーションの自治

的な手段としての博物館学等が挙げられる。

所在地と参加者（専門家、一般市民、クリエイター）の役目、そして世襲財産、博物館学の対象、所蔵品という概念に変化が見られる。博物館学に参加する者やクリエイターに対してより大きな決定権が割り当てられる様になった。しかし、我々が対象としているのが展示会の結果あるいは過程であろうと、あくまでも博物館学的活動の中心は展示物である。

この新しい博物館学は、伝統的で都会的な博物館学のイメージに基づいて構成された限界のあるいは断絶的な学問ではないが、新しい博物館学的談論の結果であり、代々蓄積された博物館学的知識を統合している。そして多様な形態で参加する事の意味をより明確な意識によって示し、より明白な社会的意味合いをもたらしている。

すなわち、我々が対象としている博物館学とは、現代社会の状況に構造を適合させる為に多大な努力を示す社会的博物館学という幅広い概念に従う非形式的なものである。他の多くの国々にも適用させる為に定義を広げる努力は、UNESCOの事務局長であるフレデリック・メイヤー氏がICOMの第15回目の総会の冒頭演説で述べた内容に要約されている。「地域の博物館、"壁のない"博物館、エコミューゼ、地方を巡回する博物館、あるいは現代におけるコミュニケーションの無限の可能性を探る博物館の設立という目に見える形で現代の博物館学上の改革が見られる。全ては新しい、本



質的な、そして哲学的な認識に起因する」

ICOMが推進した1972年にチリのサンチャゴの会合で採択された決議を振り返ってみたい。「博物館の活動が変化する為には、学芸員や責任者の考え方、さらには依存する体制自体も進歩的に変えてゆかなくてはならない」新しい博物館の専門家を育成するに当たって、博物館学的談論の新しい条件も踏まえなくてはならない。非公式の博物館学という分野における革新、変化、そして何よりも新しい方向を発見するのは間違いない。

ポルトガルにおいて博物館学を教えるに当たって一番大きな課題は、博物館学のマニュアルに書かれている事を教える代わりに、将来の博物館学者達が社会のあらゆる面を網羅した社会変化という状況の中で行動する為の手段を教える事である。

疑問が沸かない展示品しか提供しない場合、それは古くさい博物館学的考えに根差した考古学的なものにすぎない。我々が対象としている博物館は、単に物だけではなく、何よりもアイデアを扱っている。博物館学は長い間、物を「正確に」展示する事を保証する一連の規則に従ってきたのは事実である。こういった見地から、現代の博物館学のあらゆる側面（新技術、相互作用、仮想現実等）において改善が行われ、斬新な手法が導入されたのである。

しかし、アイデアのみならず展示品の為にも、博物館学と展示の全般的技術が、博物館に関連した自主的なコミュニケーション手段をますます反映している事実を認識しなくてはならない。展示品が豊富であろうと控え目であろうと、また尊重あるいは支配されているかの如何に関わらず、従来の博物館にとっては本質的には、「継承された」物にすぎない。

我々はモンテ・レドンド博物館の現状に不満を感じている為、博物館学にまつわる問題を大変重要視している。これらの問題点に関しては、ルソフォンの人文科学・技術大学（ULHT）とリスボン国立自然史博物館の協力を得て、研究開発プログラムの一環として調査が実施されており、博物館によって作られた物に基づく博物館学的方法を模索している。その概念はフォルムの扱い方によって表現される。

すなわち、視覚的なコミュニケーション手段としての博物館学は、フォルムを活用し、フォルムのコミュニケーションにおける可能性を開発する事ができる。しかも、

そのフォルムは物自体から受け継ぐのではなく、それぞれの状況に合わせて形成するのである。

平衡、重ね合わせ、透明度、光と影、同時性、連鎖、緊張、ひずみ、求心性、フォルムと深みといった概念は、博物館学の実施にとって決して相容れないものではない。しかしながら、現在のところ博物館によっては博物館学的展示品にしか適用されておらず、形成されたフォルムの新しい言語を表わす要素には活用されていない点を敢えて強調したい。

博物館学の理論の可能性を更に調べ、ピエール・フランカステル同様により大きな視野から想像的創作の認識論について考えるのであれば、各要素の現象は、そのグローバルな背景における位置づけと機能次第であるという考えを受け入れるのは当然である。従って、私たちが視覚化するものは、ただ単に感覚的で機械的な要素ではなく、想像力と創作力に富み、美しいと同時に創造的実在の真正な知覚となるのである。「あらゆる知覚は思索でもある。また全ての推理は直感でもあり、全ての観察は創作でもある。すなわち、物の形はある特定の瞬間において網膜に投射されたものだけではない。厳密に言えば、イメージは、我々が人生を通してあるものを視覚でとらえる全体的な体験として定義される」（ルドルフ・アーンハイム、『芸術と視覚的認識』、サンパウロ、1994年、40ページ）。

記憶の役割は、最終的に独創性の決め手となる想像力の本質に統合されなくてはならない。

我々の仕事の本質であると共に基本と思われるコンセプトを提示し、モンテ・レドンド博物館の創立以来16年間を通じて、介在的機能の指針としてきたのである。

添付された図表は、博物館学的プロセスにおける各構成要素のフォルムと位置づけの重要性を示している。異なる人口層と博物館の影響範囲に起因する要望、社会グループ、企業、学校、家畜の飼育、学校に対する支援の中で開発された構造、開発に対する主導性、観光、モニター制度、文化教育等が挙げられる。博物館の敷地は、中心から放射線状に5キロの範囲を網羅する面積をもち、13世紀半ばに建造された古い屋敷の規模に相当するものであるが、意外にも現代に至るまで社会・経済的な一貫性を維持してきたのである。

一方で、非公式の管理委員会はその活動

範囲を調整役に止めており、既存の資源を入手可能にし、入手した物がニーズに見合うかどうか確認している。ルソフォン人文科学・技術大学の教授はモンテ・レドンド博物館において博物館学の知識を培った事もあり、同大学の大学院課程における社会博物館学の訓練プログラムの作成に積極的に協力する事がこの委員会のもう一つの役割である。この学問の研究の進み具合、そして博物館と大学の共同研究プロジェクトを容易にしている。

このような大学との親密な関係は、本質的で深く根差した考えをもたらし、博物館学という分野における外見上の異なる側面を自然に受け入れる為の素地を作ったのである。

資源の限られた地方という狭い環境の中では、美容師や裁縫師（家計の収入にとって不可欠である）と同様に、障害児の為の学校施設の建築や松林（木材と松脂を生産する林業における主要資源である）の破壊に対する抗議の他、ヨーロッパ共同体の法令、そして来館者に対する生態学的博物館学ツアー等の位置付けも尊重しなくてはならない。

しかし、地域におけるハイテク企業（冷凍食品、製材所）の展示物は、もはやより良いライフスタイルを得る為の手段は他の都市へ移住するだけではない事を示した。またそれとは反対に、地方という環境の中では高度な訓練プログラムがより高い収入を得る為の最も確実な方法である事も示したのである。職場の安全に敏感な人々の為の兵站学上の手段を備えた医師の配置、妊婦に対する情報の提供、職人を対象とした訓練と年に一度開かれる品評会における職人の作った製品の評価といった活動も実施している。

博物館の活動が減少する時期がある為、これらの率先した活動は継続的に行われていない事は周知の通りである。上記の例は博物館の情報提供機能を説明している。町のライフスタイルは変化しつづけており、博物館自体もその変化の一部である。そして博物館は、必要に応じて、そういった変化に従って新しい活動を必ず開始していることを示している。

注：ポルトガルは他国に制圧されていたため、民衆が自由になっていくプロセスでエコムーゼの理念が重要な役割を果たした。

It is becoming more and more evident that the museums all over the world are going through modifications which manifest themselves at different levels. Beyond the traditional functions of collecting, conserving and exhibiting the objects. The museums aim is more and more to serve as means of communication open to the problems of our contemporary world. For this purpose they have modernized themselves by making use of all the technologies available, by keeping up-to-date with marketing and business management guide lines. In other cases, they act as centers of social/cultural incentive, searching to participate and be the vehicles of the development for the environment which sustains them.

As rudimentary as the attention given to the contemporary panorama of Museology in Portugal may be (including the Museum of Monte Redondo). We should recognize its multifarious character, where concepts, attitudes and objectives meet to express not only, museology's general tendencies, but also the role and the place the participants want to play in the society, asserting their rights as citizens.

The different forms of Museology developed throughout the country, especially after the revolution of the 25th of April, 1974 which brought democracy to the country and put an end to the colonial empire (Angola, Mozambique, Guinea, Timor...) allow us to confirm that parallel to the State's Museums, come to life hundreds of museological processes due to the strong initiative of the cultural, ecological and associative movement, supported by the autonomous power amidst a deep decentralization process.

There are thousands of people which in different and more or less doctrinized ways found in museology the privileged means of expressing the many patrimonies, historical, architectural, linguistic, archeological and anthropological in a context of identifying and valuing the local skills and specializations.

We are without a doubt dealing with museological processes; permanent or intermittent, creative or reproductive of models, conservative or participant in the development of the communities which sustain them. We are essentially dealing with a poor museology without financial means nor sophisticated knowledge identified sometimes by outdated ideologies and contradictions. But we are also dealing with a museology which expresses the culture of our times, The mixed cultures and the expression of a changing society.

The museums and museological processes are in our thinking the real expression of contemporary Portuguese Museology. This everyday museology reveals itself to be an essential component of change. It is not a marginal or ruptural phenomenon, on the contrary, it is the product of a more democratic and freer society, of a more communal conscious, of a new model development which favors decentralization and consequently values natural and human resources at the local level.

The widening of the concept of patrimony causes the redefinition of the "museology's objects", the idea of the community's participation in the managing and practice of museology as a means of development, questions of interdisciplinary, the use of new technologies, museology as an autonomous means of communication.

The place and function of the participants (professionals, public, creators) is changed, as well as the notions of patrimony, museological objects and collections. The power of decision is more assessable to the museological participants and creators. In all cases the exhibits continue to be the center of the museological activities, whether we are dealing with the product or the process of exhibition.

Although not being a marginal or ruptural museology structuring and basing itself on the traditional and urban museology image. This NEW MUSEOLOGY which is a result of the new museological discourse, and therefore integrates the museological knowledge accumulated throughout generations, it shows by its diverse forms, a clearer conscience of what is meant by the idea of participation, therefore calling forth a more evident social implication.

We are therefore, talking about an informal museology conforming to a vast concept of SOCIAL MUSEOLOGY which expresses the considerable effort on the part of the museological structures in adapting to the conditions of modern society. This effort of adaptation extending itself to many other countries, was summarized by the General Director of the UNESCO, Frederic Mayor, on the opening of the XV General Conference of ICOM, as following: the "museological revolution of our times manifesting itself by the founding of community museums, museums 'sans murs', ecomuseums, itinerant museums or the museums exploring the infinite possibilities of modern communication. All have their roots in a new organic and philosophical awareness".

Remembering once again the conclusions of the 1972 Santiago de Chile's reunion, promoted by the ICOM, where it read: "The transformation of the museum's activities also demand a progressive change on the mentality of the curators and the people responsible for the museums, as well as the structures from which they depend". The need to train new museum professionals must include the new conditions of the museological discourse. It is without a doubt in the field of informal museology that we can find the innovation, change and most likely the new course.

The biggest challenge in the teaching of museology in Portugal is not to teach what appears in the museological manuals, but to give the future museologists the means to permit them to act in a context of social change which encompasses all the aspects of society.

If an exhibit limits itself only to the presentation without questioning, it becomes a kind of archeology belonging to an archaic museological thinking. In the museums we deal, most of all, with the ideas and not merely the objects. It is true that for a long time museography corresponded to set of rules that guaranteed the 'correct' exhibit of the objects. It was from this aspect that contemporary museography introduced improvements and novelties in all its aspects (new technologies, interactivities, virtual realities...).

For the benefit of the objects as well as the ideas, we should, nevertheless, recognize the fact that museography and the general techniques of exhibiting represent more and more an autonomous means of communication in relation to the museum, whether or not the museological object is exuberant or submissive, respected or manipulated, for the traditional museum it continues to be essentially an 'inherited' object.

Due to the discontent with this situation in Monte Redondo's Museum we give great importance to the question of museography. Question which is being studied in a research and development program with the participation of the Lusophone University of Humanities and Technologies (ULHT) and with the Lisbon's National Museum of Natural History, searching for museography ways based on the objects created by the museums; whose ideas are expressed through the manipulation of the forms.

Thus, museography as a means of visual communication can make use and develop the communicative potential of the FORM, not inherited from the object itself, but created for each separate situation.

The notions and ideas of balance, superposition, transparency, light and shadow, simultaneity, sequence, tension, distortion, centrality, form and depths are not foreign to this museography practices. Nevertheless we should emphasize that its current use by some museums is put only at the service of the exhibited museological object, and not at the service of the elements that express the new language of the forms created.

Looking to further examine a possible theory of museography, and if from a larger scope we think like Pierre Francastel about the epistemology of the imaginary creation, it is natural to accept the idea that the appearance of any element depends where it is placed and its function in a global setting. Thus, what we visualize is far from being only a sensory-mechanical element, it becomes a truly perception of



the creative reality as well imaginative, inventive, beautiful... "ALL perception is also thinking, all reasoning is also intuition and all observation is also invention. Therefore, the shape of an object does not merely depend on its retinal projection at a given moment. Strictly speaking, the image is defined as the total visual experiences with a given object all through our lives" (Rudolf Arnheim, *Art and Visual Perception*, Sao Paulo, 1994, p.40). The role of memory must be integrated in the essence of the imaginary which in the end conditions the creativity.

The bringing forth of concepts that constitute our work and which we judge to be fundamental, have all through the 16 years of the functioning of Monte Redondo's Museum serve as a guide for its interventions.

Thus, the chart presented shows us the importance of the form and the place occupied by each of its components in this museological process. Starting from the requests originating from different sectors of the population, and from the area of influence of the museum; social groups, companies, schools, cattle raising, structures are developed in the areas of school support, development initiatives, tourism, monitoring and cultural training. The area of the museum, which encompasses a ray of about 5 km around the Museum's Nucleus, corresponds to the boundaries of an old estate founded in the middle of the thirteenth century that has surprisingly kept its social-economic coherence up to our present times.

On one hand, the Informal Board of Administration limits itself to the coordination, making available the existing resources or assuring that its acquisitions are according to its needs. On the other hand, part of this Board is an active collaborator of the post-graduate training program in social museology of Lusophone University of Humanities and Technologies, whose teachers museological knowledge has been

acquired in Monte Redondo. This facilitates the learning process of the course and the collaboration in the research projects done in a copartnership; Museum/University.

This close relation with the University allows for essential and deep reflection that has brought to the museological milieu the natural acceptance of a apparently different aspects.

In a small rural environment with limited resources it is as important to value the position of hairdresser or seamstress (essential to the family's income) as well as accommodating a school for handicapped children, protests against the destruction of pine wood (main resources for the forest industry of wood and resin, legislate for the European Community, or take visitors on a tour of Ecomuseology.

Still an exhibit on the region's high technological companies (frozen foods and saw-mills) served to illustrate the fact that the migration towards other cities is no longer the only means to attain a better lifestyle; on the contrary a training program at a high level is best guaranteed in a rural environment to have access to a better income. The museum also provides the medical doctor with the necessary logistic means for people to be sensitized on work safety, give information to expecting mothers, provide the artisans with training and valuing their products through the organization of an annual fair.

It is understood these initiatives do not take place on a continual bases for there are periods when the museum reduces its activities. These examples illustrate the museums information chart, assuring whenever necessary that new activities will be opened according to the towns lifestyle which is in constant mutation, being the museum also part of that mutation.